

分析哲学とニーチェ

飯田 隆

2022年6月

1

はじめに正直に言ってしまう。今回この原稿を書くために読んだ『道徳の系譜学』を除けば、ニーチェの書いた本で、私が全部読んだと言えるのは二冊しかない。『悲劇の誕生』と『この人を見よ』の二冊である。読んだ時期もはるかにむかしで、たぶん学生のときだろう。ニーチェの最初の本と最後の本であるのは偶然にちがいない。後者には少し辟易したが、前者には感心した覚えがある。ただし、何に感心したのか、いまでは覚えていない。どちらも哲学の本として読んだのではない。その内容も哲学と関係するとは思わなかったのではないだろうか。

これまでも何度か書いたことだが、私が哲学に興味をもったきっかけは、『科学時代の哲学』（一九六四年、培風館）という三巻本のシリーズに出会ったことにある。これから私は、過去の哲学に対する全否定という論理実証主義流の見方を教わった。そのせいだろう。一般に「哲学」とされているものの大半は、真剣に読むほどの価値はないものだと、修士課程の終わりまで思っていた。

この考えがまちがっているかもしれないと思うようになったのは、アメリカの大学院に行ってからである。そこでは、博士論文提出資格を得るために、哲学史の授業をいくつか受けなければならなかった。私が受けたのは、アリストテレスについてのものと、「デカルト、スピノザ、ライプニッツ」と題されたものである。二つのことにおどろいた。ひとつは、どちらの授業でも、原文を時間をかけて読むというような日本式のやり方は問題にもならず、どの哲学者についても、その著作を英訳で大量に読むことが中心にあることであり、もうひとつは、その哲学者の議論を再構成したうえで検討する現代の論文もまた読むべきものとして指定されることである。

過去の哲学者について現代の哲学者—英語圏の論文であるから当然「分析哲学者」である—が書いた論文を読むというのは、当時の私にとってはじめての経験だった。それだけに、これは大きな印象を残した。それはまるで、アリストテレスやデカルトの議論が、先月どこかの雑誌に発表された誰かの論文にある議論と同様に扱われているのを見るのに近かった。こうした論文を

読んだうえで、それが論じているアリストテレスなりデカルトなりのテキストに向かってみると、それが十分議論するに値するとわかるだけでなく、自分も議論してみようかという気にさせられるという経験を何度かした。

いま思うと、過去の哲学との私の付き合い方を決めたのは、こうした経験である。私に了解可能であり、ときには、口をはさみたくないような議論が可能な相手として現れる限りで、過去の「哲学者」の残したものは、いまでも私にとって哲学でありうる。プラトンもカントも、こうして付き合いえるようになった哲学者である。その際に、分析哲学のスタイルで書かれた研究がガイドとなったことは言うまでもない。それどころか、そうしたガイドがなければ、プラトンにもカントにもそもそも興味をもたなかつたろう。

ということは、分析的な研究の対象とならない哲学者は、縁がないままにとどまるということである。そうした過去の哲学者は当然いると思われた。その最たる存在はヘーゲルである。『科学時代の哲学』に出会った頃に読んだライヘンバッハの『科学哲学の形成』（市井三郎訳、一九五四年、みすず書房）が、その冒頭で「理性とは実体であり、また無限の力であり」と始まるヘーゲルの文章を取り上げて、その無意味さを揶揄しているのを見て以来、ヘーゲルは分析哲学の対極にある哲学者であり、私とはずっと無縁のままにとどまると思っていた。それがそうでもないかもしれないと思い始めたのは、一九九〇年代のことだったろう。たぶん、そのきっかけは一九九四年に出版されたロバート・ブランダムの大著『明示すること』¹の序文で、『精神現象学』についてのピッツバーグ大学でのセミナーが触れられているのを見たことだろう。「分析哲学はヘーゲルにまで来たのか」というのが私の率直な感想だった。

ブランダムがヘーゲルに言及していることは私の目を引いたが、同じ頃、ニーチェもまた英語圏の哲学で議論の対象となっていた。こちらについては、気が付いていても、ことさら不思議と思わなかったのは、ブランダムが扱っているのが言語哲学に属する主題であるのに対して、ニーチェについて論じていたネハマスにしてもバーナード・ウィリアムズにしても、少なくともかれらのニーチェ論²においては、もっぱら価値の問題にかかわっていて、こちらについて私は、通り一遍の興味しかもっていなかったからだろう。「ニーチェに分析哲学が来た」ことを私に強く印象付けたのは、むしろ二〇〇一年に、ニーチェについての巻が『オックスフォード哲学リーディングス』の一冊として出た³ことである。何しろ『オックスフォード哲学リーディングス』と言えば、因果性とか指示とか行為といった主題別に編集された分析哲学のコアに属する論文集だったからである。その中にも、特定の哲学者に関するものはあったが、それは、プラトンであり、デカルトであり、ロックだった。そ

¹Robert Brandom, *Making It Explicit*, 1994, Harvard University Press.

²Alexander Nehamas, *Nietzsche: Life as Literature*, 1985, Harvard University Press. Bernard Williams, *Ethics and the Limits of Philosophy*, 1985, Harvard University Press. Bernard Williams, *Shame and Necessity*, 1993, University of California Press.

³John Richardson & Brian Leiter (eds.), *Nietzsche*, 2001, Oxford University Press.

こにニーチェだから、おどろかない方がどうかしている。その証拠に、編者のひとりのジョン・リチャードソンは、その序文の冒頭で、このシリーズに「ニーチェの巻があるというのには異常な感じがある」と述べて、そのあと、いろいろと弁解につとめている。しかし、このアンソロジーは、ニーチェにもまた、私が興味をもてるような哲学があるのかもしれないと思わせた。

2

ところで、このリーディングスのもうひとりの編者は、今回その著書の翻訳『ニーチェの道徳哲学と自然主義』（大戸雄真訳、二〇二二年、春秋社）が刊行されたブライアン・ライターである。しかも、その初版は、このリーディングスと同じ頃に出ている。

ライターのこの本は、『道徳の系譜学』のコメンタリーの形を取っている—私が『道徳の系譜学』を読むことになったのは、そのせいである—が、実際には、邦訳の表題からも見当がつくように、ニーチェが自然主義者であることを論証するのを目的としている。そして、そうすることを通じて、「倫理学、認識論、形而上学（…）について考えるために上手く整えられた哲学上のカテゴリー分類や論証の膨大なレポトリ」といった「分析哲学のリソース」（同書、x頁—以下で頁数のみを示す場合は、この本の頁数である）を用いることで、ニーチェの見解がいかに明確化できるかを示すことも目指されている。

「自然主義」という概念自体、および、ライターが用いているその下位分類（「訳者解説」五五五頁の図1参照）こそ、こうした「哲学上のカテゴリー分類」のひとつである。これを用いて、ライターは、ニーチェのプロジェクトを、一方で科学の方法と連続し、他方で科学の成果とも連続するような仕方、道徳に関する事実の説明を与えようとする、方法論的自然主義のプロジェクトである（一七頁）と論じる。

これがニーチェの解釈として正しいのかどうかは、私がとやかく言うようなことではない。ただ、いろいろと文献をあたっているうちに気付いたのは、ライターのこうした解釈が、論理実証主義者がニーチェを受け取った仕方とよく似ていることである。分析哲学の手法を用いたニーチェの解釈が、分析哲学の源流のひとつである論理実証主義でのニーチェの了解と一致するというのは、興味深い。そこで、論理実証主義とニーチェという主題についての最近の研究を紹介しておこう。

これは、オンラインのフリージャーナル *Journal for the History of Analytical Philosophy* に掲載された「ウィーン学団のニーチェ受容」⁴という論文である。その著者アンドレアス・ヴラヒミス（Andreas Vrahimis）は、キプロス

⁴Andreas Vrahimis, “The Vienna Circle’s reception of Nietzsche” *Journal for the History of Analytical Philosophy* vol. 8 (2020) No. 9

大学の所属になっているが、分析哲学の歴史を、「大陸哲学」を含む二〇世紀の哲学史のなかで考察している哲学者である。この論文の目玉は、論理実証主義の中心人物であったモーリッツ・シュリック（Moritz Schlick 1882–1936）が、一九一二年から翌年にかけて、当時かれがいたロストック大学で行った、ニーチェについての講義の原稿⁵を検討することで、かれがニーチェをどのように理解していたか、また、どう評価していたかを明らかにして、それが、もっと後までシュリックのなかで変わらなかっただけでなく、ウィーン学団の他のメンバーにもある程度共有されていたことを確かめた点にある。

ヴラヒミスは、シュリックがニーチェに関して次の四つのテーゼを認めていると言う⁶。

- (N1) ニーチェは、反形而上学の哲学者である。
- (N2) ニーチェの哲学は、科学の特定の分野—なかでも心理学—における成果と密接に関係している。
- (N3) ニーチェは、実証主義者である。
- (N4) ニーチェは、啓蒙思想家である。

ヴラヒミスが考察しているウィーン学団の他のメンバーは、フィリップ・フランク、オットー・ノイラート、ルドルフ・カルナップの三人である。(N1)は、シュリックだけでなく、これら三人にも認められているという。(N2)もほぼ認められているが、(N3)については、フランクとノイラートが認めるのは、それより弱い主張

(N3*) ニーチェは、科学的世界観の発展に大きく寄与した。

であると言う。「科学的世界観」とは、ウィーン学団のマニフェスト「科学的世界観、ウィーン学団」（一九二八年）⁷の表題にあるものと同じだろう。他方(N3)の「実証主義」とは、「哲学は、知識を得るために、科学の経験的方法を超えるような特別な方法を所有していない」⁸とするものである。最後に、(N4)は、フランクによっても支持されているという。

「実証主義」のこうした特徴づけのもとでは、(N3)と(N2)を合わせると、ニーチェは、ライターの言う方法論的自然主義者であることになる。よって、この両方を認めるシュリックは、この点で、ライターのニーチェ解釈に賛成するだろう。また、これはヴラヒミスの論文にはないが、次の前提

(M) 形而上学は、経験を越えた知識を与える

⁵これは、現在刊行中のシュリックの全集の一冊（Moritz Schlick, *Gesamtausgabe 7: Nietzsche und Schopenhauer*. (Hrsg.) Mathias Iven, 2013, Springer）として公刊されている。「ニーチェとショーペンハウアー」というそのタイトルからして、ひとをおどろかせるに足る。ただし、私は未見である。

⁶Vrahimis, *Ibid.*, pp.1–2.

⁷拙著『言語哲学大全 II 意味と様相（上）』（一九八九年、勁草書房）四七頁参照。

⁸Vrahimis, *Ibid.*, p.2.

を認めるならば、(N3)からは、そうした知識のありえないことが出てくるから、(N1)もまた帰結する。

同様に、ライターが(N3)を支持し、かつ、(M)を認めるならば、かれは(N1)も支持することになるだろう。かれが(M)を認めるのかどうか、この本だけでは判断できなかったが、本書の第二版で付け加えられた「あとがき」の「力への意志の形而上学」(四六〇～四六六頁)で、ライターが「力への意志の形而上学」を、「イカれた形而上学」であり、「自らの表明する自然主義の残りの部分と完全に相反する考え」(四六五頁)と言っていることは、かれが(N1)にシンパシーをもっていると推測させる。

(N3)より弱い(N3*)だけを認めるとされているフランクとノイラートにとっては、(N3*)から(N1)は帰結しない以上、ニーチェを反形而上学の哲学者と考えるための別の論拠が必要になる。また、ヴラヒミスは、カルナップが(N3)を支持するとは述べていないから、カルナップが(N1)を支持するのだとすれば、それがどのような理由によるのかが明らかにされなければならない。

3

カルナップの有名な論文「言語の論理的分析による形而上学の克服」(一九三一年)⁹は、次の段落で終わる。

形而上学は、芸術の不完全な代替物ではないかというわれわれの推測は、次の事実によってさらに確証されると思われる。それは、きわめて高い芸術的才能をもつ形而上学者、すなわち、ニーチェがこの[理論と芸術の]混同という誤りからほぼ免れているという事実である。かれの著作の大部分は主に経験的な内容をもっている。そこにわれわれが見出すのは、たとえば、芸術上の特定の現象の分析であったり、道徳の歴史的=心理学的な分析である。しかし、他の者ならば形而上学か倫理学で表現するようなものを、もっとも明確に表現する段となると、つまり、『ツァラトゥストラはかく語りき』において、かれは、誤解を招くような、理論の形式ではなく、公然と、芸術の形式、詩の形式を選び取るのである。

この段落からは、カルナップに、(N2)、つまり、ニーチェの哲学が科学の成果と密接に関係しているというテーゼを帰することに一定の根拠があることがわかる。しかし、ここでカルナップは、ニーチェのことをはっきり「形而上学者」と言っているのではないだろうか。つまり、ヴラヒミスの主張とは異なり、カルナップは(N1)を認めていないように見える。

⁹Rudolf Carnap, "Ueberwindung der Metaphysik durch logische Analyse der Sprache" *Erkenntnis* 2 (1931) 219–241.

ヴラヒミスは、この問題を、ニーチェの哲学の時期による違いによって解決しようとしている¹⁰。しかし、そうしなくとも、ニーチェが形而上学者であると認めながら、同時に、ニーチェが反形而上学の哲学者であると論じることが可能だと思われる。そのためには、カルナップが形而上学をどう特徴づけるかを見てみればよい。つまり、カルナップは、形而上学は知識の領域には属さず、むしろ感情の領域に属すると考え、知識のみを相手とする哲学の中に位置をもちえないと考えていたと思われる。つまり、カルナップは、(M)を拒否する。それゆえ、形而上学を、理論の形式ではなく、詩の形式でのみ表現したニーチェは、カルナップと同様、(M)を拒否する点で、反形而上学の哲学者なのである。

ニーチェの名前が出てくるのは、一九三一年のこの論文だけではない。『世界の論理的構築』（一九二八年、以下『構築』と略する）にニーチェの名前が何回か現れることは前から気付かれていた。しかも、そこでのニーチェへの言及の仕方は、否定的なものであるどころか、その反対に肯定的なものである。

カルナップはシュリックよりも一世代若いのが、ニーチェの著作、とくに『ツァラトストラはかく語りき』に感激した点では同様のようである。最近のカルナップ研究で決まったように引かれる文章がある。『カルナップ故郷に戻る—イェナからの眺め』という論文集¹¹への序論としてゴットフリート・ガブリエル (Gottfried Gabriel) が寄稿した論文のなかの、次のような文章である¹²。

カルナップにとって、フレーゲの『概念記法』が、いわば、机上の書ならば、ニーチェの『ツァラトストラ』は枕頭の書であった。

たしかに、『概念記法』と『ツァラトストラ』ならば、前者は知識の領域、後者は感情の領域に属するものとして共存できるかもしれない。しかし、カルナップは、詩の形式を取らないニーチェの著作をすべて認めないわけではないだろう。

ライターによれば、二人のニーチェがいる。「ヒューム主義的ニーチェ」と「治療的ニーチェ」である。前者は、道徳の自然主義的説明を目指すニーチェであり、後者は、「諸価値の価値転換」を少数の選ばれた読者に引き起こそうとするニーチェであり、前者は後者のために援用される（四四五頁）。論理実証主義のニーチェ理解をシュリックで代表するならば、それが「ヒューム主義的ニーチェ」に大きな価値を認めていることがわかる。カルナップのニーチェ理解の特色は、「治療的ニーチェ」を高く評価しながらも、それを哲学の領分ではなく、詩の領分に属すると明言した点にある。かれが「ヒューム主義

¹⁰Vrahimis, *Ibid.*, p. 22.

¹¹Steve Awodey & Carsten Klein (eds.), *Carnap Brought Home: The View from Jena*. 2004, Open Court.

¹²*Ibid.*, p.12

的ニーチェ」も評価していたことは、『構築』におけるニーチェへの肯定的言及を証拠として挙げることができよう。それゆえ、カルナップもまた、ニーチェを、「論理実証主義」と呼ばれるようになった自分たちの哲学運動の先覚者と認めていたと思われる¹³。

4

論理実証主義者たちによるニーチェの高い評価は、ひとつの謎を生み出す。それは、ひとがすぐ思うような謎ではない。つまり、かれらがいったいどうして、ニーチェのようなスタイルの作家を肯定的に評価できたのかというものではない。これは、『オックスフォード哲学リーディングス』にどうしてニーチェの巻があるのかといった謎と同様であって、表面的な印象が謎を生み出すだけのことである。ここで問題にしたいのは、必ずしもニーチェにだけ関係するのではない、より大きな謎である。

いまでこそ、分析哲学の始まりをフレーゲに置くことは当たり前のようにになっているが、しばらく前—具体的には「一九七〇年代までは」だが、もう半世紀前であることに私としては愕然とする—には、分析哲学の始まりは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのケンブリッジだとされていた。ムーアの『倫理学原理 (*Principia Ethica*)』(一九〇三年)とラッセルの『数学の諸原理 (*The Principles of Mathematics*)』(一九〇三年)、そして、何よりもラッセルの論文「表示について (“On denoting”）」(一九〇五年)が、分析哲学の始まりを告げたとされていた。

これが分析哲学の最初の段階だとすると、次の段階は、一九二〇年代末から一九三〇年代にかけての論理実証主義だということになる。この段階が、それに先立つ段階を引き継いでいるということは、主に二つの事実によって示されると考えられている。ひとつは、ラッセルの論理学が与えた影響であり、もうひとつは、ウィーン生まれではあるが、ケンブリッジの伝統の中から出てきたウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の果たした役割の圧倒的な大きさである。

¹³いまや、カルナップは、論理実証主義者のなかでもっとも詳細な歴史的研究の対象になっている。そこから見えてくるのは、第一次大戦後のドイツ哲学のさまざまな潮流から影響を受けることによって、『構築』が成立したという事実である。私を含めて、この本の多くの読者が、目にしながらも無視してきた、ドイツの当時の哲学者や心理学者への言及の多くに重要な意味があることは、最近になってはじめてわかったと言ってよい。そうして言及された哲学者のひとりがニーチェであるが、ハインリッヒ・リッケルト (Heinrich Rickert 1863–1936) も、そうした哲学者である。カルナップが、一学期在籍したフライブルク大学で、かれの講義に感銘を受けたことが知られている。そして、リッケルトの哲学は、『構築』の成立に密接にかかわっており、ニーチェとの関係も、ここから出てくるのだという。『構築』がどのような影響を受けて成立したかを主題とした論文集『「構築」への影響』(二〇一六年) (Christian Damboeck (ed.), *Influences on the Aufbau. Vienna Circle Yearbook 18*. 2016, Springer) には、『構築』へのリッケルトの影響を主題とした論文が二篇も収められている。Thomas Mormann, “Carnap’s *Aufbau* in the Weimar context” (*Ibid.*, pp. 115–136) と Mikko Leinonen, “Assessing Rickert’s influences on Carnap” (*Ibid.*, pp. 213–232) である。ニーチェとの関係については、とくに前者が参考になる。

論理実証主義者によるニーチェへの高い評価は、ニーチェが実証主義もしくはそれに近い立場を取っていたと考えたことによる。実証主義とは、哲学的自然主義¹⁴がこの時代を取っていた形態だと考えられる。ライターが『ニーチェの道徳哲学と自然主義』で論じている（八八～九九頁）ように、ニーチェが一九世紀半ばのドイツの唯物論に強い共感をもっていたことは、かれが実証主義もしくは経験主義に近かったことのもうひとつの証拠となるだろう。つまり、論理実証主義者がニーチェを高く評価した理由がなぜであったかを知ることは、かれらが実証主義者もしくは経験主義者として、二〇世紀前半において自然主義を代表する存在であったことを、あらためて思い出させてくれる。これに対して、二〇世紀初めのムーアとラッセルにしても、また『論理哲学論考』のウィトゲンシュタインにしても、自然主義者ではない。むしろ、知識の源を経験的なものに限らない点で、反自然主義者と言ってよい。謎はここにある。つまり、どうして一九世紀以来のドイツの実証主義—論理実証主義者の場合、これはマッハ、そして表面に現れることは少ないがニーチェによって代表される—という自然主義と、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてのケンブリッジの反自然主義という、正反対の潮流がひとつになりえたのかという謎である¹⁵。

ここからはしばらくニーチェとは関係のない話になってしまうのだが、最後にまたニーチェに戻るので、少しだけ我慢してもらいたい。

問題の謎へのひとつの答え方は、論理実証主義者、もっとはっきり言ってカルナップは、実証主義もしくは経験主義の主張を精密な仕方で定式化するとともにその正しさを示すために、新しい論理学¹⁶を道具として用いたというものである。しかし、この答えが不十分であることは明らかである。「論理実証主義」あるいは「論理経験主義」が「論理」を冠している理由は、論理学を道具として使うということではなく、自然主義の一九世紀的形態であ

¹⁴一九世紀はまた文学においても「自然主義」が言われた時代である。この「自然主義」と哲学上の自然主義とのあいだに関連がないわけではないが、いちおう区別しておく。

¹⁵論理実証主義とケンブリッジ分析学派の違いは、論理実証主義をイギリスに導入するのに中心的な役割を果たしたスーザン・ステッピング (Susan Stebbing 1885–1943) が強く意識していたところである。一九三三年の講演「論理実証主義と分析 (Logical positivism and analysis)」で、彼女は、ムーアに代表されるケンブリッジ学派の分析概念と、論理実証主義者の分析概念—それを彼女は『論理哲学論考』における分析概念と同一視する—とが根本的に異なることを指摘したうえで、前者を擁護している。彼女によれば、『論理哲学論考』はケンブリッジ学派に属するものではない。次を参照。Nicolay Milkov, “Susan Stebbing’s criticism of Wittgenstein’s Tractatus” in Friedrich Stadler (ed.), *The Vienna Circle and Logical Empiricism* (Vienna Circle Institute Yearbook 10), 2003, Springer pp. 351–363.

¹⁶この論理学は、ラッセルのものであって、たぶんフレーゲのものではない。カルナップはフレーゲの講義に感銘を受けて、新しい論理学の重要性を知ったと思われるが、フレーゲからの直接的な影響がみえるのは、『意味と必然性』(一九四七年)以降だろう。カルナップがその授業に出た時期のフレーゲは、ラッセルのパラドックスによって、論理主義のプログラムを断念した後のフレーゲであることを覚えておくべきである。いずれにせよ、ラッセルからの影響とは別に、カルナップがフレーゲから正確に何を受け継いだかは、さらに検討する必要がある。

ここにはまた、フレーゲの哲学史上の位置という厄介な問題がからんでいる。フレーゲが自然主義者(実証主義者)でないことは明らかだが、そうかと言って、二〇世紀初頭のムーアやラッセルのような立場を取ったわけでもない。フレーゲを新カント派に分類することも試みられた(『概念記法』と『ツァラトウストラ』を並べた文章の作者の論文 G. Gabriel, “Frege als Neokantianen” *Kant-Studien* 79 (1986) 84–101) が、証拠は不十分なままにとどまる。

る実証主義や経験主義の致命的と思われた欠陥、すなわち、数学的真理の必然性と確実性を説明できないという欠陥が、新しい論理学が与えてくれる洞察によって除去されるという主張のゆえだからである。そして、この主張は、一方で、『論理哲学論考』における「論理的真理＝トートロジー」説と、他方で、『数学原理』における「数学の全体は論理学から導出できる」という主張を足し合わせることから出てくると考えられた。しかし、これが『論理哲学論考』の誤読に基づくものであり、こうした結合が不可能であることは、いまでは明らかである¹⁷。

さすがにカルナップは、こうした組み合わせが問題をはらむこと、また、それを構成する主張のどちらにも難点があることに気付いていた。それは、ゲーデルの不完全性定理の発見（一九三〇年）によって明らかになった。これ以後、かれは、論理的シンタクス、ついで論理的意味論という方向で進むことによって、実証主義あるいは経験主義の主張は、保持されはするが、後景に退くことになる。

論理実証主義に続く、分析哲学の次の段階は、オックスフォードを中心とする、いわゆる日常言語学派の哲学である。一九五〇年代から一九八〇年代までの分析哲学においては、言語哲学が中心となることで、自然主義が明示的に拒否されたわけではないが、その当否は中心的な問題とはならなかった。もちろん、「経験主義のふたつのドグマ」（一九五〇年）でクワインは、分析的真理を拒否することを通じて、自然主義の徹底化を呼びかけたが、その実質的な影響が現れるのは、「自然化された認識論」（一九六九年）より後、一九八〇年代における言語哲学の退潮と心の哲学の躍進以後のことである。こうして論理実証主義から半世紀ぶりに自然主義が復権した。ニーチェを自然主義者とするライターのニーチェ解釈が、この時期に現れたことは、十分に時宜を得ていたわけである。

5

このように分析哲学の歴史を通じて、自然主義は、前景を占めたり、後景に退いたりを繰り返してきた。しかしながら、論理実証主義が解決したと誤って考えた問題、すなわち、論理はともかく、数学の必然性と確実性を自然主義のもとで確保できるのかという問題は、現在に至るまで満足の行く解決をみていないと私は思う。

自然主義のなかに数学を位置づけようとする方法として、これまでに提案されてきたものの中で、現在でも支持者をもつものは、三つある。第一に、数学は自然科学の不可欠な一部であるから、自然科学が正当化されるのであれば、その一部として数学も正当化されるとする、クワインの全体論的正当化がある。第二に、数学を構成する命題は字義通りには偽であるが、科学的理

¹⁷前掲拙著『言語哲学大全 II 意味と様相（上）』一一八～一三〇頁。

論における演繹を助ける道具として不可欠な役割を果たすとする、フィールドの道具主義がある。第三に、数学は科学にとって有用なフィクション（虚構）であるとする、最近力をもってきた虚構主義がある。

ここで最後に考えたいのは、このどれが有望なのか、それとも、このどれとも違う別の有望な方法があるのかではない。そうではなくて、そのどれを弁護するにしても、「数学の系譜学」といったものが必要になるのではないかということである。

「数学の系譜学」であって、「数学者の系譜学」¹⁸ではない。また、ポストモダン的な「数学の系譜学」—それがどんなものになるかは容易に想像できる—を考えているのでもない。

数学の系譜学とは、ライターの解釈するようなニーチェが、通俗的道德観¹⁹を覆すために、そうした道德観の出自を明らかにしようとしたのと同様に、数学の必然性や確実性といった考えを中心とする「通俗的数学観」を覆すために、それが、どのようにして生まれ、強化されてきたかを明らかにしようとする試みである。

こうした数学の系譜学の必要性が明らかなのは、道具主義と虚構主義の場合だろう。前者の場合には、数学的命題は偽である—「素数が無限に存在する」という命題は、素数のような数学的対象が存在しない以上、偽である—にもかかわらず、真理を表現すると考えられてきたのがなぜかが、説明されなければならない。後者の場合には、同様に、数学的命題はフィクションの一部であるのに、なぜ事実を表現すると考えられてきたかが、説明されなければならない。

全体論的正当化の場合は、数学的命題もまた、それがその一部である科学理論に属する他の命題と同様に、経験的にのみ正当化される命題であって、必然的でも絶対的に確実でもないことが、なぜ隠されてしまったかを説明することが、数学の系譜学の課題になる。

いずれの場合も、この系譜学は、ライターの解釈するようなニーチェの道德の系譜学と同様の、経験的探究となるだろう。それは、一方で歴史的探究であり、他方で人間の認知についての探究である。数学についての自然主義的説明は、それがどのような形を取ろうとも、こうした経験的探究に裏打ちされなければ不完全なままにとどまらざるをえない。それどころか、数学の経験を超えた確実性や必然性が、作られた神話にすぎないと、数学の系譜学が示すことに成功するならば、それは、数学にまで自然主義的説明を及ぼすことにためらう哲学者に対しても、そうしたためらいを捨て去る大きな動機を与えるだろう。

こうした数学の系譜学の探究にあたって、哲学は、探究の方向性を与えるという役割にとどまらず、より実質的な貢献もできる。そのなかでも重要だ

¹⁸実際、アメリカ数学会が協賛している Mathematics Genealogy Project というものが存在する。これは文字通りの系譜学で、数学者のあいだの師弟関係を追跡するものである。

¹⁹ライターはそれを「MPS (Morality in Pejorative Sense)」と呼ぶ（一〇五頁）。

と思われるのは、数学の言語についてのフレーゲ以来の見方の根本的な見直しということである。

数学と自然主義という問題設定の現在の形を作ったのは、ベナセラフの一九七三年の論文「数学的真理」²⁰である。この論文で、ベナセラフは、数学の言語についての標準的な意味論から帰結する数学の存在論が、当時支配的であった認識論、すなわち、因果性を知識の成立にとって本質的であると考えた認識論と両立しない—しばしば「ベナセラフのジレンマ」と呼ばれる—ことを指摘している。この認識論が、自然主義の現れであることは明らかである。他方で、数学の言語についての標準的な意味論とは、タルスキに由来するものであるが、そのおおもとは、フレーゲによって作られた述語論理の言語と、この言語こそが数学の言語であるという前提がある。

フレーゲが作った言語と、それについてのかれ自身による意味論的考察は、現代的な言語哲学の出発点でもある。最初、この言語は、「論理的欠陥」に満ちた自然言語に代わる、数学と科学のための言語とみなされた。一九七〇年前後から、具体的な自然言語の全体を対象とした考察が言語哲学の中心となるにつれて、論理学の言語と意味論はむしろ、自然言語の文法と意味論を与えるためのモデルの位置を占めるようになった。だが、自然言語についての探究が進展することによって、数学の言語の特異さが浮き彫りにされるようになる。つまり、数学の言語の側から自然言語を見るのではなく、逆に、自然言語の側から数学の言語を見ることができるようになったのである。

自然言語と比較されたときの、数学の言語の特異さとは、第一に、それが時制、人称、様相といった区別を備えていないことであり、第二に、これと密接に関連するが、コンテキストに依存して決まる要素がないか、あるいは、あるようにみえても容易に消去できることであり、第三に、あいまいさを許す表現をもたないか、あるいは、消去可能であることである。これは、数学の言語が、「論理的欠陥」から免れているというよりは、自然言語を有用なものとしている重要な特徴を欠くことを意味する。

数学の言語が、その特異さにもかかわらず、自然言語一般についての意味論的探究のモデルとしてはたらくことができたのは、なぜだろうか。それは、数学的命題もまた、われわれが日常出会う対象についての命題と同様、対象がもつ性質とか、対象のあいだに成り立つ関係について述べると考えたからではないだろうか。数学の言語についてのこうした見方は、言語哲学の展開にとっては幸運だったかもしれないが、数学の言語の特異さを覆い隠し、さらには、数学についての誤った観念を助長することになったようにも思われる。つまり、数学の言語を特異なものとしている三つの特徴から、数学が探究とする対象は、時間と空間を超越して存在する永遠不変の対象であると考えられることである。

²⁰Paul Benacerraf, "Mathematical truth" *Journal of Philosophy* 70 (1973) 661-679. 拙訳、ポール・ベナセラフ「数学的真理」、飯田隆（編）、『リーディングス 数学の哲学』、一九九五年、勁草書房。

いま仮に、数学の言語についての、この見方がまちがっていて、そこに現れる文は、対象の性質や対象間の関係について述べるのではなくて、まったく別のはたらきをするのだとしたら、どうだろうか。もしそうならば、数学の言語の特異性もそこから説明されるだろうし、何よりも、数学的对象のようなものを考える必要がなくなる。これは十分に検討に値する考えである。ベナセラフのジレンマから逃れる道がここにあるのかもしれない。

でも、この話はもう、いい加減、この辺で切り上げることにしよう。ただ、最後にひとつだけ言っておきたい。ニーチェからはるかに遠いところまで来てしまったように見えるが、必ずしもそうではない。かれの「系譜学」というアイデアを、数学の哲学における自然主義の擁護に使おうという発想にまで連れてきてくれたのは、自然主義者ニーチェというライターの解釈だからである。